

新しい公共活動へ

0、本書は、新しい公共の豊富な実例をもとに、それが抱える人材や資金などの課題、国づくりや街づくりをはじめとする政策面への反映、取り組みの実態を論じながら、新しい公共や全体像を浮かび上がらせ、将来を展望しようと試みる。

1、新しい公共が注目される時代背景を概観しながら、新しい公共と市場経済との関係を見る。市場経済は、それだけでは人々の安定した生活を保障するものではない。それが人々の日々の暮らしの維持と改善のために機能するには、市場経済を支える人と人との繋がりが、社会のしくみとして別に備わっていないなければならない。新しい公共の機能を行政機能と民間機能、公的動機と私的動機の観点から4つに分類。

2、新しい公共の4つの機能ごとに、全国の実例を取り上げ、特徴を述べ、課題を整理する。それによって新しい公共の活動の理念よりも地域の現場の差し迫ったニーズから実践されていることを明らかにする。

日本社会では都市と農村を問わず、新しい公共が担っているサービスの多くは、古くから住民の連携によって生活の一部として日常的に提供されていたが、このような地域コミュニティの機能は経済発展とともに衰退していった。新しい公共によって取り組まれている内容は様々であるが、共通しているのは活動の便益がサービスを直接受け入れる人に限定されることなく、広く地域社会全体に及ぶことである。

3、新しい公共の担い手と活動資金については、新しい公共は、類似の活動の歴史はあるが、近年の社会の要求に応える活動という意味では歴史が浅く、組織が脆弱で財政的にも不安定なことなど、解決すべき課題が多い。それらの現状を整理し、あるべき方向性について考えている。

4、行政を支える基本理念や個々の施策に、新しい公共の考え方がどのように反映されているのか、国づくりや街づくりの視点から、時代背景を踏まえながら見ている。

5、新しい公共が注目されるようになった背景を、人々の社会貢献活動への関心の高まり、地域の疲弊など社会経済の切迫した状況、行政の限界など、行政側の必要性の視点から整理し、新しい公共への期待を詳述している。

6、新しい公共に着眼した契機は、人口減少と高齢化が進み、存続さえ危ぶまれる集落地域などで、地域の生活の維持、地域文化の存続に努める地域住民の姿に直に触れ、新しい公共の事業に携わる多くの方々の話を聞き、現場感覚を失わないように努め、人と人のつながりの中で活動に参加している人々の生活が生き生きとしたものになる現実を目の当たりにした、すがすがしいレポートである。

7、最後に本書が一つの契機になり、新しい公共への理解が深まり、より多くの方々の自発的な行動が誘われることになれば望外の喜び、と結んでいる。